西宮歴史調査団通信　4月号

2012

平成 23 年度活動報告会

平成 24 年 3 月 10 日 (土) に平成 23 年度活動報告会が開催されました。活動報告会は、調査団員以外の参加者も交えて大盛況でした。

活動報告会（橋梁班の報告）

平成 24 年度の活動開始！

活動報告会の後、平成 24 年度の登録会をおこないました。初参加の方も含めて、今年度も多くの方が登録されました。1 年間、よろしくお願いします。

西宮歴史調査団通信 2012年 5月号

発行 西宮歴史調査団　西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

古文書班を加え３班で始動

いよいよ西宮歴史調査団の新年度の活動がスタートしました。

調査団は平成24年4月14日に西宮市郷土資料館で初顔合わせ。新人を含め21人が集まりました。

団長に川上早苗さんを再任。今年度から新設の「古文書班」と、従来からの「橋梁班」、「石造物班」の3班に団員が分かれて、各班別にリーダーを選出、今年度の活動についての方針を決めました。各班のおもな目標などは下記のとおりです。

石造物班

リーダー　原田 孝一　粟野 光一

名門「西宮神社」を測ります

今後の調査対象の神社は、南部だけでも鳴尾八幡、日野、上原八幡などがありますが、とくに廣田神社、西宮神社といった大きな所が残っています。

そこで今年は、全員で西宮神社に取り組むことに決めました。そのため4月下旬に現地集合して詳細を打ち合わせ、活動できる曜日ごとにグループを組み、境内を区分して調査にあたることになりました。

ふくみみ福ちゃんも西宮神社を調査中？

橋梁班

リーダー　倉田 克彦

市内の橋をハシからハシまで…

橋梁班は親柱と親柱の橋名板に名前がある橋梁を調査の対象として、西宮市にある「全ての橋梁」を調査し、記録していくことを目標にしています。

羽衣橋＝右岸の上流側

今年度は東川、夙川、中新田川、洗戎川、津門川、名塩川などにスポットをあてながら、調査団員が各自で調査を進めていきます。

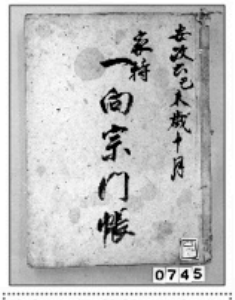
古文書班

リーダー　高谷　康彦　多々良さゆり

旧西宮町の宗門帳のデータ作成

今年度から新たにスタートした古文書班は、江戸時代以降の古文書を調査します。調査の対象は郷土資料館に約４００冊も所蔵されている旧西宮町の宗門帳です。

宗門帳には旧西宮町で生活をしていた人々の名前や住所、年齢などが記されています。貴重な紙史料に触れながら、旧西宮町の住民たちのデータを記録していきます。



今年から調査に取組む宗門帳＝郷土資料館蔵

編集・衣笠周司（石造物班）

西宮歴史調査団通信 2012年 6月号

発行 西宮歴史調査団　西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

今年から新設された「古文書班」って、どんな活動をしているのでしょうか。

5月23日に郷土資料館での例会をのぞいてみると、皆で手分けして約400冊もの旧西宮町の「宗門帳」のデータ作成に取り組んでいました。その活躍ぶりをリポートします。

「宗門帳」とは？

宗門帳は、正しくは宗門人別改帳といい、江戸時代に作られた戸口の基礎台帳です。宗門改めは、江戸幕府がキリシタン禁止令として、一人一人の所属する仏寺と宗派を把握するために行ったものです。これに、各領主が領民を把握するための人別改めが合わさり、原則として毎年作成されていました。

西宮町の場合は、宗派の違いに加え、家持か借地か借家かという居住状態ごとに帳面が作られました。

その内容は、家ごとに所属する壇那寺が記載され、戸主を筆頭にその家族・同居人の名前と年齢が記されたものです。

こんな宗門帳と取り組んでいます

「宗門帳」にわくわく…

古文書班

宗門帳調査に取り組む古文書班のメンバー

“150年前”に談論風発

「宗門帳」のデータづくりとは、どんなことをするのでしょう。

各自が宗門帳を1冊ずつ担当し、その内容をノートに写し取ります。

「ボールペンは机の上に出さないで！」「資料の上に本を載せたりしないで」…。宗門帳は約百五十年前の古文書なのです。だから慎重に、大切に扱われます。

活動の雰囲気はまさに談論風発。班員の一人は「古文書をじかに手で触れるのって、とてもわくわくしますよ」と話してくれました。

「解読」に一苦労

「こんな仕事をしているから…」だそうです。

「でも読めない漢字は飛ばしながら書き取っていいんですよ。読みなれてくると分かってきたりしますから」と。それに励まされながら、崩し字に挑戦しています。

ちなみにトップのカット写真の字の読み方は

「一向宗打出村妙福寺旦那　地所者今津村小西屋　平兵衛所持建家主播磨屋年四十七」

だそうです。皆さん読めますか？

この字　何の字？　気になる字！

「え～？、これなんと読むン？」

「宗門帳」には、人の名前がずらりと並んでいます。それが達筆で書かれているので、なかなか読めません。この解読がまず大変。仲間同士でつきあわせたり、辞書をめくってみたり。

どうしても…というときには、衛藤彩子〝先生〟が登場！　どうして先生はそんなに読めるんですか？

編集・衣笠周司（石造物班）

西宮歴史調査団通信 2012年 7月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

重要な高畑町遺跡

「西宮の古代氏族」

6月20日に郷土資料館で「西宮の古代氏族」についての歴史講座がありました。

大変興味深い内容で、聞く人を魅了しました。このとき発表された俵谷和子さんに、この調査にかける思いを記していただきました。

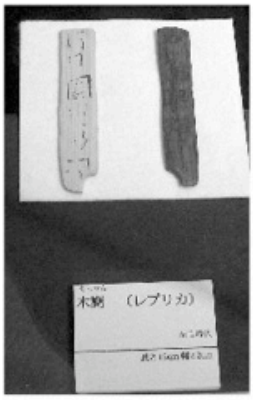
自由な発想力で 古代史を考えよう

「氏族」ときくと、みなさんはどのようなことを想像されますか。おそらく、今の家族・親類などの血族や同族集団を意味するように思われるのではないでしょうか。

小学館の『国語大辞典』には、「特に未開社会の生活単位であった血族集団。共同の先祖を持つ諸家族の成員で構成され、その先祖を首長(氏の上)とする社会集団」と説明されています。つまり、実際に血縁関係があろうとなかろうと共通の先祖をもつと考えた集団を指し、社会的な意味をもつ集団なのです。

『新選氏姓録』は、平安時代にその集団の系譜を記したもので、京畿諸氏について国ごとに記されています。摂津国の項にも百を超える氏族の名が記されています。そのなかで今もっとも注目されているのが、日下部氏

曲物や木錘も高畑町遺跡から見つかっている



高畑町遺跡から出土した木簡（レプリカ）

です。西宮北口の高畑町遺跡から「日下部」と記された木簡が出土したからです。

この木簡は、西宮の新しい古代史の扉を開ける重要な資料ですが、これだけで全てが解明されたわけではありません。日下部氏は、武庫郡の大領（県知事のような役職）で、西宮に官衙（官庁）があった可能性がでてきます。しかし、従来の旧武庫村（尼崎市）説を否定することはできません。

古い時代を考えるのに、文献だけではわからないことがたくさんあります。現在の思考とらわれず、自由な発想力で臨んだほうが正しい答えが見つかるかもしれません。みなさんもぜひ、柔軟な頭で古代史について考えてみてはいかがでしょうか。

歴史講座で発表する俵谷さん

編集・衣笠周司（石造物班）

西宮歴史調査団通信 2012年 8月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

左側には吽形の狛犬（メス）

私は狛犬ファンです。「石造物班」の一員でもあります。今年は西宮神社の石造物を調べると聞き小躍りしました。狛犬さんに対面してお姿を測定できる、と期待したのです。

ところが、なんと！　ここの狛犬さんは『石造物』ではないのです。青銅製なんです。「狛犬さん本体は石ではありませんから測定しません。台座だけです」と資料館の方のつれない言葉！　それならば余談ですがと「青銅製」にも拘ってみました。（K）

向かって右、阿形の獅子（オス）

西宮神社

狛犬さんは『石造物』ではなかったが…ブロンズ製

吉井良英禰宜にお尋ねしました。

「なぜ青銅製なのですか？　作った人、寄贈した人はどんな人ですか？　戦災で傷んだので修理したそうですが？」

吉井禰宜さんは「焼夷弾などで台座が傷付いたので、戦後取り替えましたが、本体はそのままです。狛犬については、ここに記したものがあります」といって貴重な資料を見せて下さいました。

それによると、この青銅の狛犬は、天保12年（1841年）9月に、辰巳屋藤兵衛、八馬喜兵衛、八馬七兵衛ら9人が寄贈したもので、その大きさは曲尺で3尺、台石五尺、重さは百貫目（375kg）ずつである、と天保12年10月19日の「社務日誌」に記述されているそうです。

作った人の名前が尻尾にきざまれている

製作銘は狛犬さんの尻尾にあって大阪屋利兵衛・石井重五郎南海藤原義行造之となっています。

青銅製の狛犬といえば、宮島の厳島神社、大阪の今宮戎神社、京都の北野神社、神戸の湊川神社などが、皆さんのおなじみでしょう。なんでも青銅製でもっとも古いのは、元和年間（1615～24年）と推定されている大阪中央区の御霊神社の狛犬で、船場の豪商たちが奉納したものではないかと考えられているそうです（「大阪狛犬の謎」小寺慶昭）。

吉井禰宜さんのおかげで「ブロンズの狛犬さん」と少し親しくなれたような気がしませんか。

狛犬さんに面会に行ったとき南紀の梅娘さんが梅の奉納に来ていました

★お願い★　調査団の皆さんの投稿をお待ちしています。400～600字くらい。写真付き可。行数削行などで手を入れる場合があります。

編集・衣笠周司（石造物班）

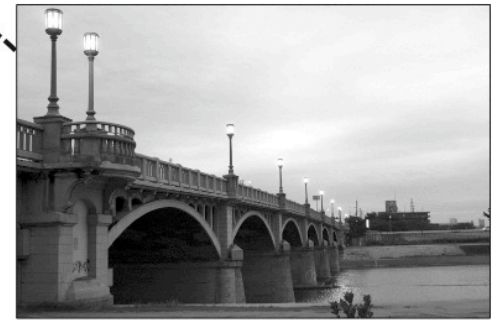
西宮歴史調査団通信 2012年 9月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

橋を探して　川を知る

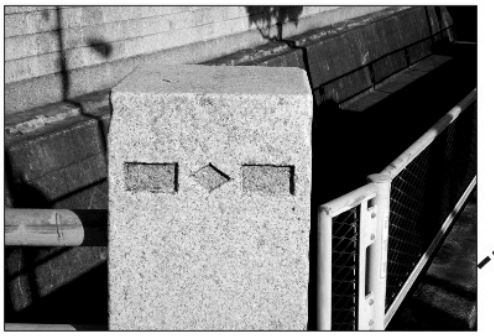
橋と言っても

橋と言えば、国道2号・武庫大橋のような、親柱、高欄（欄干）のあるものを思い浮かべます。昔の西国街道や中山道などでは、用水路を跨ぐように石の板を置いて橋としたものが多くありました。親柱などはあったのでしょうか。橋の原形とも言えるこのような橋は、石の代わりにコンクリートとなって、今も多く見られます。



重厚で装飾的。橋の代表作
（武庫大橋、国道２号）

コンクリート床版だけ。これも橋（百間樋川）



親柱に謎の刻印（砂田小橋）

橋銘板にほほえましい文字（仁川百合野橋）

橋の名前は

橋の名前はその辺りの名称（門戸橋）や景観（翠流橋）、功績のあった人の名前（九郎橋）、和歌に詠まれた雅なもの（洲鳥橋）、単純に川の名前（津門川橋）、周辺の由緒ある物（こほろぎ橋）などに因んでいるようです。何か基準があるのでしょうか。

橋梁班の　よもやま話

橋の不思議

親柱に□◇□の刻印（砂田小橋他）、同じ名前の橋が幾つも（夙川橋）、橋銘板の文字の書き手は誰（小学生の文字、達筆の文字、書体もいろいろ）、昔の石橋は道幅よりかなり狭かった（百合戸橋の幅1丈＝10尺、通る道は西国街道で2間半＝15尺）等、謎がいっぱい。

（文＝橋梁班・倉田克彦、写真＝橋梁班）

橋さがし

河川、水路は暗渠で流れたり、網の目のように繋がったりで、その川がどこをどう流れているのか判らないことがあります。地図を睨み、現地を探索して川の流れを知ってから、どこに橋があるか見て回ります。ここまでは準備作業で調査はそれからです。

★お願い★　調査団の皆さんの投稿をお待ちしています。400～600字くらい。写真付き可。行数削行などで手を入れる場合があります。

編集・衣笠周司（石造物班）

西宮歴史調査団通信 2012年10月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

文化財調査ボランティア現地解説会

西宮歴史調査団は11月10日に文化調査の現地解説会を開きます。今回は一般から参加者を募り「甲東村」を中心に案内して歩きます。行程の概要を荒木知さんに記してもらいました。

★現地解説会 スケジュール★

日　程　11月10日（土）・雨天中止
時　間　9時集合～12時解散予定
集　合　阪急「仁川駅」東改札口
申込み　不要
参加費　無料・但し仁川駅～仁川口橋のバス運賃210円は参加者各自負担
行　程　約6km　（カッコ内は解説担当者）

9：10　阪急バスに乗車
9：14　阪急バス「仁川口橋」下車
①仁川口橋　（倉田さん）
②百間樋児童遊園　川上団長挨拶
③百間樋　（荒木さん）
④甲東ポンプ場北の百間樋説明板
⑤西廣寺・地蔵　（高橋さん）
⑥西国街道　（高谷さん）
……段上公園・休憩……
⑦極楽橋　（倉田さん）
⑧字三十六の取水樋
⑨大市八幡神社　（石造物班）
⑩道標　（粟野さん）
⑪永福寺の地蔵　（地蔵班）
⑫百合野戸橋　（倉田さん）
⑬道標　（梅木さん）
⑭門戸橋　（高橋さん）
解　散　阪急「門戸厄神駅」

百間樋をくぐってきた水の西宮側の出口

西宮歴史調査団と歩く

甲東村

甲山の東山麓に位置する西宮市甲東地区はその昔、武庫郡大市庄と呼ばれていました。

今回は村の発展に寄与した「百間樋川」と「西国街道」を訪ねます。

「百間樋」とは、安定した農業用水を確保するため、武庫川から水を引く用水路の一部で、天井川である仁川の下をサイフォンの原理でくぐる長さ百間に亘る暗渠をいいます。

戦国末期にはすでに完成していました。この余水は下流の村々にも流され八千石の田畑を潤したといわれています。

↑門戸橋付近で調査活動中

←門戸厄神と甲山観音への道標

「西国街道」は、広義では京都から九州太宰府までをいい、狭義では京から西宮までをいいます。西昆陽の「髭の渡し」から段上、上大市、下大市、門戸を通って廣田、越水へと向かっています。

この道を通った人たちは、奈良時代に太宰府帥大伴旅人、室町時代には高師直兄弟の逃避行、李氏朝鮮の政府高官、江戸時代には参勤交代の西国大名、幕末の政変には七卿落ち、また西宮に駐屯していた長州兵の上京、などがありました。

↓大市八幡神社

★お願い★　調査団の皆さんの投稿をお待ちしています。400～600字くらい。写真付き可。行数削行などをする場合があります。

編集・衣笠周司（石造物班）

西宮歴史調査団通信 2012年11月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

国道176号を行くだんじり（写真＝細木ひとみ）

秋燦燦

歴史調査団では、10月13日に名塩八幡神社の秋祭りを見学に行きました。

そのときの文を細木さんに、写真を細木さんと衛藤さんに提供していただきました。

名塩八幡の秋祭り見学

山之町のだんじり（写真＝衛藤彩子）

名塩八幡神社に宮入するだんじりは八台あり、西宮市では一番多い神社です。八台が揃うのは宵宮の夜だけで、岸和田のだんじりのように走り回ることもないのですが、七台が連なって曳かれている様子はやはり賑やかなものです。

北之町のだんじり（写真=衛藤）

また、名塩は山あいの地ということもあり、何トンもあるだんじりが狭くて急な坂を下るのはとても迫力があります。

今回の見学会では、宮入や各町の青年団によるニワカを見てもらうことができなかったので、ぜひもう一度訪れてみてください。名塩の皆さんの〝だんじり愛〟をもっと感じることができると思います。

（文・細木ひとみ）

名塩小学校に集まった7台のだんじり（写真＝衛藤彩子）

★お願い★　調査団の皆さんの投稿をお待ちしています。400～600字くらい。写真付き可。行数の削行などをする場合があります。

編集・衣笠周司（石造物班）

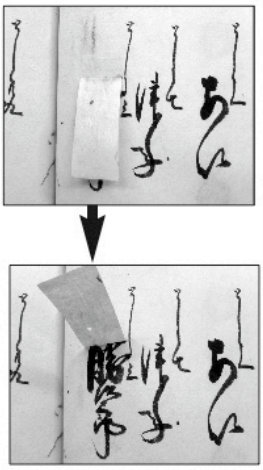
西宮歴史調査団通信 2012年12月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

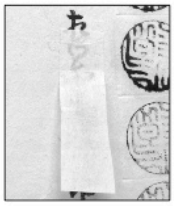
相果＝あいはて＝？

「相果」って何ですか？「あいはて」と読み、死んだ人のことです。

ちょっと面白い話を古文書班の3人から教えてもらいました。



貼紙をめくると亡くなった勝治郎の名が…



見にくいが貼紙の下に「相果」の文字

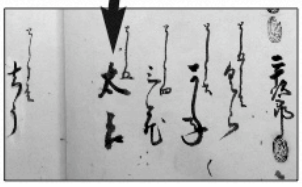
当たり前の話ですが、嘉永7年の宗門帳には嘉永6年の宗門帳に記載されていた人の多くが一つ年を取って書かれています。人の移動があった時は、嫁に来ただの行ったなどと理由が書かれて、貼紙で名前を追加されたり抹消されたりします。

亡くなった人は「相果勝治郎(あいはて<名前>)」とだけ添え書きされ、名前の上に紙を貼られて抹消されます。ところが、添え書きも何も無く、嘉永6年には記載されているのに7年は突然名前が無くなっている人がいました。「ちょうど書き換えの時期に亡くなったかしたのでしょう」というのが資料館の衛藤彩子さんの説明でしたが、亡くなったのか引っ越したのか、はたまた時空の隙間に落ちたのか。何かその人の存在自体があやふやになってしまいました。

ぶっきらぼうな「あいはて」、そして名前の上の貼紙は、思った以上に人の実在を認識させる効果があるようです。

（古文書班　多々良さゆり）

左の帳面　5行目の「太吉」が 右では 消えている



宗門帳からの試算例

	人口	平均年齢
合計	273	32.7
男	122	32.4
女	149	32.9
不明	2	47

	世帯数
合計	83
世帯主男	66
世帯主女	15
世帯主不明	2

年齢帯	人数
10才未満	42
10代	35
20代	39
30代	43
40代	31
50代	32
60代	15
70代以上	12
不明	24
合計	273

1世帯当り	世帯数
1人	18
2人	19
3人	16
4人	8
5人	7
6人	8
7人	3
8人	3
9人	1
合計	83

古文書班からの ちょっと面白い話！

平均年齢は32・7歳？

宗門帳の解読の大きな目的のひとつは当時の人口の状況を知ることにある。四月の発足以来、担当分として約八十世帯二百七十人程の人数分を読み進めてきた。その結果を使って簡単な集計を試みたので、その例を上の表に記しておきます。

私の担当分は借家の住人で、何となく今の核家族のようで特徴的なことは余り見えない。古文書班約10名、各人毎に進捗は異なるが既に延べ（同一集団の別年度がある）五百世帯、千五百人分近い解読が出来ているのではないかと思う。

持ち家世帯分同一集団の別年度分などもあり、これらを集計比較すると面白い結果が出るのではと期待している。また、親と同居している息子が世帯主になる場合、何歳ぐらいで嗣ぐのかとか、男子は何歳ぐらいから成人と認められるとか、その他習慣のようなこともわかるのではないかとの期待もある。

（古文書班　高谷　康彦）

歴史の「うねり」の中で

私がいま取り組んでいる宗門帳は嘉永3年（1850年）のものです。

嘉永3年という時代は、国内では3年後にペリー艦隊が来航し、同年、長州藩が武庫川から須磨まで海岸警護にあたります。

1850年は、中国で太平天国の乱が勃発。清国打倒を目指しますが内部分裂により崩壊。欧州では、1848年にフランスで二月革命が起こり、共和制の臨時政府が樹立。革命はドイツにも飛火して三月革命となりました。

宗門帳の家族も、やがて歴史の大きな「うねり」のなかで翻弄されることになるのです。

（古文書班　野川　至）

★お願い★　調査団の皆さんの投稿をお待ちしています。400～600字くらい。写真付き可。行数削行などをする場合があります。

編集・衣笠周司（石造物班）

西宮歴史調査団通信 2013年 1月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

2013年おめでとうございます

まだまだ寒さの厳しい季節ですが、皆さんは年末年始をどのようにお過ごしだったでしょうか。

これから調査団活動は通常の調査活動の他に、一区切りの年度末の報告会に向けてまとめをしなくてはなりませんが、この一年の各自の頑張りをしっかりアピールし、新年度からも楽しく活動できるような報告会になるよう頑張りましょう。

西宮歴史調査団団長　川上　早苗

西宮神社の逆さ門松

そこに"不思議な燈籠"！

石造物班　西宮神社からの報告

【その1】燈籠がワープ？

火曜日班の担当は本殿の西側で、古燈籠が70基近くある。まず資料館配布の配置図を元に追番をつけ、高さを計測し、記銘の調査に入った。途中で燈籠が1基殖えているのが判明した。大の大人が4人いて情け無い。梅木さんの同級生の茶店の主人曰く、倒れたので安全な場所に移設したとの事、確かに全体の数は変わってなく、もとの位置はスペースがあり、移されたという燈籠には新しい傷跡があった。一件落着。

↑元の位置には空いたスペースがあり、←移された燈籠には新しい傷跡がある

【その2】対でない常夜燈

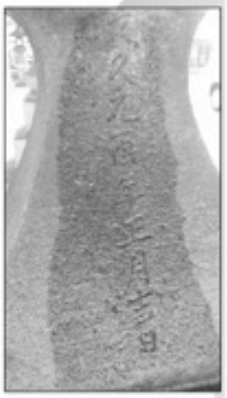
稲荷神社は元大坂奉行所西宮勤番所にあったのが明治六年に移設された。そこの一対の常夜燈の片方には【文久元酉年正月吉日】との記銘があり、もう片方は【安□五午五月立之】とある。建立年月日が異なるのもおかしい。午年は安政五年である。

刻印石博士の田中さんの努力で□は「正と夂」の合字（異体字）とわかった。「正偏に夂」が「正冠りに夂」なのだ。そして、安政の次は万延で文久はその次。しかも大革命が起こるといわれる辛酉。辛酉の年は二月に改元するという平安初期からの不文律があったので安政八年には改元だったのが、安政六年三月三日に井伊大老が暗殺されたので三月十八日に改元したということだ。そして翌・万延二年二月十九日には文久と改元。

つまり、万延は一年も無かったのだ。また、文久元年には正月はなかった。立年改元（元日に遡って改元と認定）と考えても、文久という年号は二月十九日からでそれ以降の建立になる。縁起をかついで文久元年正月にしたのか。不思議な話だ。

（石造物班・荒木知）

↓右の燈籠には「文久元酉年正月吉日」左には「安□五午五月立之」



刻印石博士・田中さん

ミニミニ"巳"にちなんで！

小泉八雲がいとおしんだ「巳さん」を紹介します。その子孫？は下の写真の通り現在も松江の八雲旧居の蓮池に住んでいます。夫人は次のように記しています。

小泉八雲旧居で Photo:Kinugasa

「蓮池がありまして、そこへ蛇がよく出ました。（八雲は）『蛇はこちらに悪意がなければ決して悪い事はしない』と申しまして、自分の御膳の物を分けて『あの蛙取らぬため、これを御馳走します』などと言ってやりました」

（小泉節子「思い出の記」）

編集・衣笠周司（石造物班）

西宮歴史調査団通信 2013年２月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

川の流れを辿り、それに架かる橋のあれこれを調べています。その現場では…。

橋梁班から現場報告

橋の移り変わりを 川面に映して…

◆こんな所に石の橋

「除け堤」へ向かう道が旧津門川を渡る所に、アスファルト舗装されているので判りづらいが、幅と厚さが30㎝ほど、長さ２ｍ余りの石材を７本並べた、全幅２ｍ余りの今どき珍しい石橋がある。

河川（水路）工事の際に新たに（昔に倣って）石を渡したのか、廃材の利用なのか、元からあったものなのか。普段は水のない用水路を跨ぐ、どこにでもありそうな橋ですが、それなりの歴史があるようです。

（倉田　克彦）

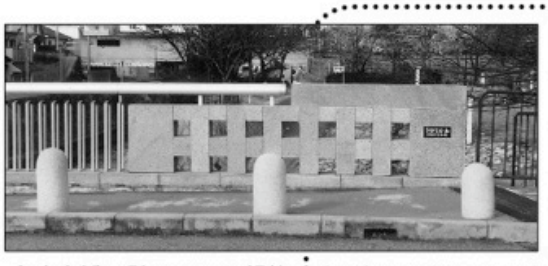
旧津門川を跨ぐ石橋

◆オヤオヤ？ 親柱

写真は岩清水橋の親柱です。橋は東川（御手洗川）の中流域、阪急神戸線の南側に架かっています。親柱は高欄の一部といわれますが、これは柱というより、どこか壁のようで面白いデザインが施されていると思います。

橋名の由来は古い地名に因んだものです。平安期の頃、このあたりに伊和志豆神社という由緒あるお宮が存在していたようで、この伊和志豆がなまって石清水と呼ばれるようになったそうです。

（清水　貞夫）



岩清水橋の壁のような親柱

◆消えゆく？ 親柱

２０１２年５月中旬から家の近くの中新田川に架かる橋の調査を開始しました。然しながらその頃から一部の橋で、これまであった橋の石やコンクリート製の親柱が壊され、橋の欄干に取り付けられた銘板に変ってしまいました。順次橋の近代化が進みそうです。古い、懐かしい親柱の調査は一刻も早くしないと、もう見られなくなりそうです。

（小西貞一郎・佳陽子）

川か？ はたまた用水路か？

橋梁の調査資料として手にした「西宮市水路指定図」には川の流路は〝津５９２〟と表示されているだけ。昨年調べた津門川に流れ込む神呪川などの調査を始めたが、その川の特定に難儀した。

地元の人に尋ねるが、はっきりしない。加えて、親柱のある橋が見つからず途方に暮れる。そこで水路図を作成した市の下水道部下水河川課を訪ね、教えて貰う事で漸く夫々の川の流路が特定できた。

（高橋　博己）

置物…それなりに親しまれている？

◆欄干にカットバン！

親柱の上や欄干の上には色々な物が置かれています。その多くはたぶん近くの落とし物で「警察に届けるほどで無いけど、もしかしたら落とした人が探しに来るかもしれないな～」と思った心優しい人がそこに陳列するのだと思います。もちろん心ない人のおいていったゴミの場合もありますが。

欄干や親柱の上ではありませんが、カットバンが貼ってある橋がありました。欄干に置かれたたばこの箱とともに不条理の極みです。

橋はマジカルな場所だ。そうですから新種のおまじないか何かなんでしょうか。誰が何故!!貼った人にぜひ会って話を聞いてみたいです。

（多々良さゆり）

編集・衣笠周司（石造物班）

西宮歴史調査団通信 2013年 3月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

今年度の活動から

西宮市立郷土資料館
学芸員 森下 真企

今年度の活動は日頃の調査活動とは別に、調査団全体で、老松古墳や名塩の祭礼の見学、調査成果の現地解説会などのほか、パネル展示にチャレンジするなど、調査団の活動の幅が拡がっています。特に定例会での「ミニ報告会」は、調査団での調査対象だけでなく、戦跡マップや、西宮神社の灯籠、名塩の祭礼に西宮砲台と、バラエティーに富んだ発表がなされ、どの発表も歴史資料をテーマにした、楽しい会になったと感じています。

今年度は27名の調査員で調査・活動を実施してきました。調査員の一歩、一歩のおかげで、着実に市内に残る歴史資料の記録が進んでいます。今後も、無理のないペースで調査団の調査や活動をおこなっていければと思います。

私個人的な反省点は多々ありますが、なによりも調査員の方々に感謝です。次年度も是非、調査員としての活躍をよろしくお願いいたします。

西宮歴史調査団の地蔵調査班が約７年間をかけてまとめた報告書が、いよいよ3月末に発行されます。内容は乞うご期待です。

「西宮の地蔵」

３月末に 発刊！

歴史調査団の報告書 第二弾！

お地蔵さん見つけたら丹念に調査

この調査報告書『西宮の地蔵』は、地蔵調査班が平成18～22年度に西宮市内をくまなく歩いて、ひとつひとつの地蔵さんを調べて回ったものの成果です。

調査はすでに終わり、地蔵調査班も解散していますが、担当した学芸員が報告書にまとめる作業を続けてきました。

地域の人たちから大事に祀られているお地蔵さん

地蔵そのものを調べるのはもちろんですが、祀られている地蔵を見つけるまでが大変で、その後お世話をされている方を探してお話を聞いたり、地蔵盆を見に行ったりと、調査団発足時から約7年をかけて調べた結晶です。どのようにまとめられているのかお楽しみです。

昨年度末発行の『甲山八十八ヶ所』につづく西宮歴史調査団の調査報告書第二集『西宮の地蔵』は平成25年3月31日発行予定（1冊500円、郷土資料館窓口にて販売）です。

ただいまお地蔵さん調査中

編集・衣笠周司（石造物班）